

聖書：マタイ 26：36～46

説教題：みこころがなりますように

日時：2020年8月2日（朝拝）

イエス様はいよいよ次回、敵の手に捕らえられます。そして夜の間には不当な裁判を受け、翌日には十字架にかけられます。今日はその直前の箇所です。イエス様が拘束されずに自由に活動できた最後の時です。その時のイエス様の様子はいつもと違いました。この時いたのはオリーブ山のふもとのゲッセマネという園でした。ヨハネの福音書によると、イエス様が弟子たちとしばしば集まれた場所だったようです。イエス様は弟子たちに「わたしがあそこに行って祈っている間、ここに座っていなさい」と言われます。そしてペテロとゼベダイの子二人、すなわちヤコブとヨハネの計3人を一緒に連れて行きます。特別な機会と一緒に連れて行った12弟子の中の中心的弟子たちです。するとイエス様はそこで「悲しみもだえ始められた」と記されています。見た目に異変が現れたばかりでなく、イエス様の口からも、これまで聞いたことがないような言葉が出て来ます。38節でイエス様は「悲しみのあまり死ぬほどです」と言われました。また「ここにおいて、わたしと一緒に目を覚ましていなさい」とも言われました。こんなイエス様の姿はこれまであったでしょうか。イエス様はあらゆる力の上に権威を持つ方でした。どんな病気の上にも力を持っておられましたし、悪霊を追い出すこともしました。大自然の上にも力を持ち、ガリラヤ湖の嵐をたった一言で静め、死人さえも生き返らせるとてもない力をお持ちの方でした。その方がここで震えながら、「わたしは死にそうだ！」と言っています。しかも3人に、この場を離れないで一緒にいて！と彼らのサポートを求めています。

そして39節で少し進んで行って、祈り始められました。「そのイエス様の口から出て来た最初の言葉はこれでした。「わが父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。」 細かな言葉の意味は後で見ることにして、この祈り全体の意味は明らかでしょう。それはできることなら十字架をわたしから過ぎ去らせてください！ということです。これにかからなくて済むなら、どうかそのようにしてください！とイエス様は祈られました。ある人はこれを聞いて不思議な思いを抱くかもしれません。イエス様はこれまでご自分がやがて十字架にかかることをご存知だったはずではないか。ご自分で何度もそのことを予告して来られたはずではなかったか。少し前に見た最後の晩餐の席上で、イエス様は十字架の死を覚えるための聖餐式を制定されました。また前

回の 31 節でも「わたしは羊飼いを打つ」というゼカリヤ書の預言を引用して、ご自分がそのように神に打たれることについて語っていました。しかしそれがいよいよ実行される直前になって、イエス様の決心が鈍ったということなののでしょうか。これまでの勇敢な姿は後退してイエス様の弱さが現れ出たということなののでしょうか。しかしそのようにここを見るべきではないと思います。むしろここにイエス様がこれからかかろうとしている十字架はどんなにイエス様にとって恐ろしいものだったかということをしごく見て行くことが大切だと思います。

イエス様の十字架の死は単なる死ではありません。その死刑方法があまりにもむごたらしいということもありますが、それだけなら多くの殉教者たちも同じでした。彼らは勇敢にその死へと向かって行きました。それと比較するとイエス様の方が臆病だったということにもなりかねません。しかしそうではないのです。イエス様は「この杯を過ぎ去らせて」と祈りました。この「杯」という言葉は旧約聖書にたくさんの用例があります。たとえばイザヤ書 51 章 17 節：「目覚めよ、目覚めよ。エルサレムよ、立ち上がれ。あなたは主の手から憤りの杯を飲み、よろめかす大杯を飲み干した。」あるいはエレミヤ書 25 章 15 節：「この憤りのぶどう酒の杯を、云々」。つまりこの杯とは神の怒りの杯です。イエス様の死は、全人類の罪に対して下されるべき神の怒りを一身にその身に引き受けようとするものです。イエス様はそのために地上に来られました。しかしそれがあまりにも耐えがたいもの、恐ろしいものであることを見て、イエス様はこのようにひれ伏して祈らざるを得なかったのです。Ⅱコリント 5 章 21 節：「神は、罪を知らない方を私たちのために罪とされました。それは、私たちがこの方にあつて神の義となるためです。」 イエス様は聖なる神の御子として、罪を全く知らない方です。罪と関係のない方です。その方が罪とされ、さばかれる。それはこの方にとって考えられない犠牲だったのです。

そしてこの結果、父なる神との関係が一瞬であれ、断ち切られることになります。永遠の昔から父なる神と一つの関係に生きて来られた御子が、父なる神に見捨てられ、全く光のない暗黒へと切り捨てられます。ですからイエス様は後に 27 章 46 節で「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と十字架上で叫ばれることとなります。イエス様はその十字架を間近に見据えて本当に恐れられました。それが良く見えない人にとっては、なぜイエス様は今さら恐れているのかと思うかもしれませんが、先にあるものが良く見えている方にとって、これは尻込みせずに見つめることができる

ようなものではなかったのです。

しかしこのイエス様の恐怖心に思いを巡らして見れば見るほど、さらなる驚きとなって迫って来るのは、その後にイエス様が「しかし、わたしが望むようにはなく、あなたが望まれるままに、なさってください」と祈られたことです。ここにイエス様が常に優先されたことが何であったかがはっきり示されています。それは神の御心になることです。時々このイエス様の祈りは自分の願いを取るか、それとも神の御心を取るかでぶつかった時の祈りのように捉えられることがあります。そうではありません。イエス様はその二つの間で揺れてはいません。イエス様は神の御心になることをすべてに勝って求めています。ただその枠の中で、十字架を通らない道はないものかと問うているだけです。もしそのことが可能なら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください！と祈っただけで、神の御心に従う道を行くという大前提はいささかもぶれてはいません。私たちはここから改めて大切なことを教えられます。私たちはイエス様の最初の祈りのように、自分の率直な思いを神に申し上げて良いのです。しかし大原則を崩してはなりません。それは「あなたが望まれる道を私に行かせてください」ということです。「あなたが望まれる道こそを私に選び取らせてください」ということです。

イエス様が祈りの格闘をしている間、弟子たちはどうしていたでしょう。彼らは眠りこけていました。イエス様が精神的支えを求めておられたにもかかわらず。「一時間でも、目を覚ましていられなかったのですか」という言葉から、イエス様の祈りは5分、10分のもではなかったことが分かります。正確に一時間でなくても、そのくらい祈られたのでしょう。その間に弟子たちは眠ってしまっていました。最後の晩餐でお腹が一杯になっていたからか、そこでワインを飲んだことも関係したか、あるいはすでに夜遅い時間になっていたからか。イエス様は41節で「誘惑に陥らないように、目を覚まして祈っていなさい。霊は燃えていても肉は弱いのです。」と言われました。「霊は燃えていても」という言葉は、前回の弟子たちの35節の言葉を受けたものでしょう。彼らは「たとえ、あなたと一緒に死ななければならぬとしても、あなたを知らないなどとは決して申しません」とイエス様に忠誠を誓いました。33節でもペテロは「たとえ皆があなたにつまずいても、私は決してつまずきません」と言いました。彼らはする気もないことを、心を偽って述べていたわけではありません。その時点では心からそう思っていました。このようなある種の気高い志を指して、イエス様はここで「霊は燃えていても」と言っているのでしょう。イエス様にどこまでもついて行く！という思いで弟子

たちの心は燃えていました。しかし肉は弱い。これは人間の性質、特に肉体的な弱さを指していると思います。この克服のためには祈りが必要であるとイエス様は仰っています。いくら気高い志を持って、それだけでは足りない。肉の弱さが上回って、結局はその力の前に自分のしたいと思うことができなくなる。これに打ち勝つ秘訣は「祈り」であるということです。

こう述べてイエス様は再び二度目の祈りへ向かいました。その時の言葉が 42 節にこう記されています。「わが父よ。わたしが飲まなければこの杯が過ぎ去らないのであれば、あなたのみこころがなりますように。」 ある人はここに先の祈りと比べて祈りの前進があると見ます。最初の祈りにあった「できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」という願いがここにはない。その杯を飲まなくても良いように！とはもはや祈っておらず、これを飲まなければならないことを受け止めつつある様子がここにあると。ヘブル人への手紙 5 章 7 節はこのゲッセマネの祈りと関係する言葉と言われますが、そこにこう書かれています。「キリストは、肉体をもって生きている間、自分を死から救い出すことができる方に向かって、大きな叫び声と涙をもって祈りと願いをささげ、その敬虔のゆえに聞き入れられました。」 そして続く 8 節に「キリストは御子であられるのに、お受けになった様々な苦しみによって従順を学び」と言われています。ここにイエス様の従順の歩みには成長あるいは発展があったと言われています。もちろんイエス様は罪のない方であって、常にきよく、汚れのない方でしたが、父なる神に従うプロセスにはある種の発達があったと言われています。その具体例の一つがこの祈りに見られるかもしれないということです。イエス様はこの祈りの格闘を通して神への従順において前進されたということです。2 回目の祈りを終えて戻ってみると、弟子たちはまだ眠っていました。マルコの福音書 14 章 40 節に「彼らは、イエスに何と言ってよいか分からなかった」と記されています。まぶたが重い状態で、そのような状態にある自分たちをどうにもできなかった。その彼らを置いて、イエス様は三度目の祈りへと向かわれました。ここに「もう一度同じことばで三度目の祈りをされた」とあるから、先に述べたような祈りの前進といったものはここには特になかったと言う人もいます。

しかしこの祈りの結果が最後の 45~46 節にはっきり示されています。イエス様が 3 回の祈りを終えて戻って来ると、弟子たちはまた眠っていました。しかしこの時のイエス様の姿はどうでしょう。イエス様は「見なさい。時が来ました。人の子は罪人たちの

手に渡されます。」と言われます。ユダを先頭にした群衆の近づく音が聞こえたのでしょうか。あるいは近づくたいまつの明かりが見えたのでしょうか。いよいよ捕らえられようとするこの時、イエス様は慌てていたでしょうか。全くそうではありませんでした！イエス様は46節で「立ちなさい。さあ、行こう。見なさい。わたしを裏切る者が近くに来ています。」と言いました。これは逃げるためではありません。これは近づく者たちを迎えるためです。これは祈りの前の状態とは大いに違っています。今日の箇所最初の時点ではイエス様は悲しみもだえていました。そのあまりわたしは死ぬほどです！と言い、弟子たちに支えを求めました。そしてひれ伏して祈りました。しかしここには「さあ、行こう」と言って立ち上がる、祈りによって強くされたイエス様の姿があります。神の御心を今や確信し、その道を行くために、落ち着いて立ち上がるイエス様の姿があります。そして裏切り者に近付くために自ら前進しています。祈りによって準備ができたイエス様。これを乗り越えて進むように強められたイエス様です。一方の祈らなかった弟子たちはどうでしょうか。彼らは準備ができていません。次回見るように、霊は燃えていても、肉の弱さに負けることになります。先の誓約とは反対に、一目散にこの場から逃げ出すことになります。そのテストにおいて、祈って備えたのか、そうでなかったのかが明らかにされるのです。

以上の箇所を通して私たちが学ぶことは、私たちの救いを勝ち取るためにイエス様が払われた犠牲は何と大きかったかということではないでしょうか。私たちは今日の箇所のイエス様の姿を良く見つめる必要があると思います。その言葉によく聞く必要があると思います。イエス様は悲しみもだえられました。悲しみのあまり死ぬほどです！ともられました。できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください！とひれ伏して希いました。イエス様がこのように苦しまれたのはなぜだったのでしょうか。それは誰のためだったのでしょうか。それは他ならぬこの私のためです。私たち一人一人が受けるべき罪の罰を代わりに担うためです。私たちはこのイエス様の姿から、逆に自分の罪について思い巡らすべきではないでしょうか。イエス様は恐れることなく私たちの身代わりのための死に向かわれたわけではありませんでした。むしろイエス様は恐れながら死に向かわれました。叫びながら、涙を流しながら、もだえ、ひれ伏して祈りながら、……。しかしイエス様は祈りによって恐怖心を乗り越えて、私たちを救うための十字架へと進んでくださいました。そのことを思う時に、何と私たちはイエス様に深く愛されている者であるかが新たに分かって来るのではないのでしょうか。またイエス様が勝ち取ってくださった救いは何と尊いものであるかが分かって来るのではないのでしょうか。そのお姿

を見て、私たちはこの方の前にひれ伏し、礼拝をささげ、この方がくださる救いを受け取る者とされたいと思うのです。

もう一つ学ぶことは、この祈りの模範にならうということです。私たちは誘惑に陥りやすい者です。霊は燃えていても、肉は弱い者たちです。ですからイエス様による救いが必要でした。しかしこのことは私たちがいつまでもこの状態に居続けて良いという意味ではありません。イエス様の救いは私たちを本来あるべきあり方へ立ち返らせるためのものでもあります。御子イエス様でさえ肉の弱さに打ち勝って神の御心に従う歩みのためにはこのような祈りを必要としました。とするならなおのこと、日々祈ることが私たちに必要ではないでしょうか。私たちは自らの願いを率直に神に祈って良いのですが、このイエス様の模範に従って、神の御心に従うことを決して動かされない第一原理とする中で祈り求めたいと思います。そして自分の思いの中で色々ぶつかることがあっても、実際に「祈る」ことを通して、神が御心として示しておられる道を進んで選び取る者とされたいと思います。イエス様はこの祈りを通して、最後には「さあ、行こう！」と立ち上がって行かれました。祈りはそのように立ちはだかる困難を乗り越えて、神に従う歩みへと進むための力を私たちに与えてくれます。私たちもそのように「祈り」によって、主が歩まれた道を歩む者とされたいと思います。そしてそれを乗り越えて行くところにある神の最善の祝福に生き、またその歩みをもって神にご栄光を帰する者へと導かれて行きたいと思います。